

金星4号について

最近ソ連のロケット金星4号が金星に軟着陸した結果、金星の大気は大部分が炭酸ガスでできており、温度は四〇度から二八〇度で、人間が生存できるような惑星ではないと公表されました。加うるに米国のマリナー5号の観測結果として金星は高温の、地獄の穴であるという見解が米側の科学者から発表され、ソ連の発見を裏付けるものと伝えられました。しかしこれらは真実の発表なのでしょうか？

まず考えねばならぬことは、過去に多数の人工衛星が米ソ両国から打ち上げられて、今や地球の周辺には数百発のロケットがうようよしているにもかかわらず、それらの観測データは殆ど公表されていないという事実です。大衆は人工衛星という言葉と打ち上げたという数行の報導になれてしまつて、何がどのようになつているのか考えようともしません。関心のある人ならばこれらの実験の背後にひそむ成果と謀略とを容易に想像できるはずですが、ベトナムを舞台として米ソ中の三大国がこの惑星の支配権をめぐつて醜惡な闘争を続けている最中に、金星について驚異的な事実を発見したとしても「金星には人間がいるらしい」というような間の抜けた報導をどこの国の政府がするでしょう？ そのような報導をすれば敵国にとっては絶好の攻撃材料となりますし、第一、外交上のかけひきからみても不可能であることはわかります。要

するに耳目を驚倒させるような発表をすることによって敵側に攻撃されることと自国の科学上の權威の失墜を招くようなつまらぬことを大国がするわけがありません。各国間に謀略が渦巻いていることはご承知と思いますが、新聞に報導されるのは虚報のなかの、しかもほんの一部にすぎないと信ずべき理由は多々あります。早い話が、ベトナム戦争における米機の撃墜数は北ベトナム側と米側とで公表される数字に必ず相違があり、いづれが真実を言っているのか大衆には見当がつきません。もちろん新聞社に罪はなく、責められるべきは情報源です。ロケットの問題にしても、かつて昭和三十七年十二月十四日午後二時五十九分五十秒（米国時間）に金星に最も近い地点を通過した米国のマリナー2号による情報分析の結果、金星は低温であることが判明したので生物が生存する可能性がある、同年十二月二十六日夜フィラドゥルフィアにおける全米科学促進協会の席上でケアリフォルニア大学のコールマン教授が発表したにもかかわらず、翌年二月二十六日には米航空宇宙局の公式発表として金星表面の温度は四三〇度前後の高温だと声明が出されました。いづれもマリナー2号のデータに基づく発表ですが、こうまで内容が食い違ったのでは話になりません。このマリナー2号の観測結果なるものについてアダムスキーはまっこうから否定し、虚報に惑わされるなど警告しましたが、ベトナム戦の泥沼の様相をみても、今や何を信ずべきかの問題が私たちにとつて深刻な課題となってきました。かつて毎日新聞の記者であった大森実氏は北ベトナムへ潜行して「真実を報導した」と称しましたが、一方ライシャワー大使は「ウソを報導した」とい

って大森氏の記事を否定しました。右のいずれが真実を述べたのか、客観的証拠を持たぬ私たちは判断に苦しむだけです。結局この世界はだれかが何かをとなえても必ず他方で否定されるようにできている世界なのであって、そのように見る限り真実を追求しようという努力はすべてむなしものになりますし、だれをも信頼できなくなってきました。科学者の言うことに間違いはないと考えておられる方は、有名な科学者には大体に政府や官憲や大企業というヒモがついている実情を、身近な日本のロケット界の状況からみても容易に判断できるでしょう。権威筋の策略や圧力が科学者の純粹さをも無に帰せしめるような世界がこの惑星地球です。

ではどうすればよいか？ この世界に真に判断の基準となるものが容易に得られないとはいうものの、人間には何かを信ずる自由はまだ残されています。それで、私に対する私自身の回答は「信念を持つこと」です。自分の信念こそ自分にとっての唯一のガイドでありますから、これをまず確立してこそ目標が決定します。具体的に申しますと、私はアダムスキーのヒューマノイド（大気圏外から来る人間らしきもの）の存在説を真実なるものとしており、これについていささかの疑惑を持ってはおりません。現在はまだ地球の触手がやっと大気圏外へ伸び始めた時代であり、いわば宇宙探検のまだ早い明期にすぎませんので、米ソいずれのプローブ（宇宙探査機器）にしても案外私たちが想像するほどの性能を有するものではないかもしれず、地球へ送信した情報に何か重大な誤りがあるのかもしれないし、また機械は正常に作動して真実を伝える装置であったにしても、ブラザーズが何かの考慮のもとにそのような情報を送るような手段を講じたのかもしれない

せん。推測は自由ですが、失ってならないのは自己の確固たる信念であると思います。

最近某国GAPからの連絡によりますと、そのGAPグループはブラザーズとコンタクトしているということです。今その団体を明らかにすることはできませんが、時機が来れば詳細が発表されるでしょう。また各国からは相変わらず円盤の目撃、着陸報告が大量に流れ込んできます。こうした状況からみても、知らぬ間に重要な活動が地球の周辺で依然としてひそかに行なわれていることは充分に考えられます。金星4号について各方面から照会をいただきましたので、ここに私の意見を述べさせていただくとともに、私がGAP活動を中止する気は毛頭ないこと、今後も機関誌の発行を続けるつもりであることを強調いたします。ご支援のほどをお願いいたします。

昭和四十二年十月二十五日

日本GAP代表

久保田八郎

お知らせ

物価高騰のため本誌は次号（第36号）より定価を150円に改訂しますからご了承下さい。

なおこれまでに旧定価で誌代納入済の方は誌代切れの通知を差し上げるまで不足料金を送金される必要はありません。